

フリガナ イシイ シュウ
氏 名 石井 周
学 位 博 士 (文学)
学位記番号 新大院博 (文) 第32号
学位授与の日付 平成19年3月22日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 台湾古典詩における台湾表現—割譲前後の仙境表現を中心に—

論文審査委員 主 査 教授 井村 哲郎
 副 査 教授 芳井 研一
 副 査 教授 佐々木 充

博士論文の要旨

本論文は「台湾古典詩」における台湾を仙境に比喩した「滄海」「蓬莱」「瀛洲」などの言葉を取り上げて、萌芽形態としての「台湾意識」はどのようなものであったかを論じるものである。

本論文の構成は以下の通りである。

序章

- 第一節 台湾古典詩の定義
- 第二節 研究の目的
- 第三節 研究の対象
- 第四節 研究方法
- 第五節 台湾古典詩の先行研究
- 第六節 丘逢甲、洪棄生、呉徳功に対する後世の評価と先行研究
- 第七節 本論文の構成

第一章 丘逢甲における台湾表現

- 第一節 丘逢甲詩における「滄海」
- 第二節 丘逢甲における「蓬莱」、
「瀛洲」

章結

第二章 洪棄生における台湾表現

- 第一節 生平事蹟
- 第二節 台湾表現の変化

章結

第三章 呉徳功における台湾表現

- 第一節 呉徳功の生涯と後世の評価
- 第二節 台湾割譲前の台湾表現
- 第三節 台湾割譲後の台湾表現

章結

結論

参考文献

本論文は、最初にも記したように「台湾文学」の一ジャンルである「台湾古典詩」としての漢詩に現れている仙境表現を取り上げて、台湾割譲前と後でその表現がどのように変化したのかを、具体的に三人の詩人の詩作品について検討したものである。

序章では、本論文で研究対象とする「台湾古典詩」を、台湾で生まれ育った詩人の詩作と定義した後、日本への割譲後に台湾民主国に関わり清国に内渡した丘逢甲、台湾に残ったが日本の統治に協力せず隠棲生活を送った洪棄生、台湾に残り後に総督府統治に協力した呉徳功の3人の詩を取り上げ、それぞれの詩人の詩に現れる仙境表現の変化を検討することを課題とすることを記す。なお、本論文で検討される「滄海」「瀛洲」「蓬萊」などはいずれも、「方丈」などと並んで、神仙の住む理想郷であり、仙境表現である。

第1章では丘逢甲が取り上げられる。丘は割譲後大陸に逃亡し、再び台湾に戻らず、大陸から台湾を望み、台湾を想う詩を作った。丘の詩文は台湾でも中国でも高く評価されており、テキストとなる詩文集も多いが、それらのテキストをまず検討したあと、丘が詠んだ詩には、「滄海」の語が好んで用いられ、「瀛洲」や「蓬萊」の語が用いられることは少ないことを明らかにした。その理由として、丘が客家であり、科挙試験を受けた「進士」として、清朝を離れて台湾を詠むことはなく、台湾海峡をさして「滄海」の語を使用していることをあげ、したがって、台湾割譲以前にこれらの仙境を比喻した「台湾表現」が見られないことについて検討を行った。具体的には「時代の巨大な変化」という意味で、「滄海横流」「滄海桑田」「滄海揚塵」などの言葉が使用されていることを明らかにし、そこでの「滄海」は台湾と台湾海峡をさしており、台湾をさすときには台湾の動乱状態を、台湾海峡の場合には台湾と大陸の隔絶を意味しているとする。また、「蓬萊」「瀛洲」は滄海に比べて用例は少ないが、やはり台湾を示しているとし、その理由について、丘が台湾を離れざるをえなかったこと、丘には伝統的な中華思想があり、故郷台湾は清朝の台湾であり、「大海」を意味する「滄海」という言葉で、割譲以前の台湾と台湾海峡を表現したとする。割譲以前の台湾について「蓬萊」「瀛洲」などの表現がないのも、丘が大陸出身の官吏であり、台湾を辺境ととらえていたためであるとする。

第二章では、洪棄生の台湾表現を検討する。洪は、科挙登第がかなわなかったが、台湾割譲後には家に籠もり、漢詩文を教授することなどで生計を立てた。洪は日本人を拒絶し、断髮令に従わなかったが、これは洪が保守的な人間であったことにもよっている。本章では、洪の詩について、まずテキストクリティークを行ったあと、洪の台湾表現の変化を、「滄海」「滄海桑田」「滄海揚塵」「蓬萊」などについて検討し、台湾割譲以前には、これらの語彙は台湾そのものを指すことはなく、台湾海峡の比喻として肯定的に使用されているのに対して、割譲後の詩では、否定的に、あるいは台湾が日本の支配下に入ったことを嘆く台湾割譲の喩として使われていることを明らかにした。そして、割譲によって、洪は、故郷台湾の本来あるべき姿への憧憬として、仙境表現を使ったとする。洪は、あくまでも「清朝人としての台湾人」として生きることをめざし、日本による統治には投降しなかった。このことが、台湾表現の変化に現れており、清朝から分断された台湾という意識は、清朝期の祖籍意識や宗族意識を越えて、現在の台湾人アイデンティティーにも連なりうる台湾意識醸成の要素の一つとなったとする。

第三章では、呉徳功の台湾表現を検討する。呉は幼少から詩文を学び、秀才にまでいたり、清末に『彰化県志』の編纂を命ぜられ、調査結果を「採訪冊」としてまとめたが、日清戦争後の抗日運動のさなかに散逸した。呉自身も抗日運動に参加しているが、兵を率いたわけではなく、治安維持に努めた。日本軍が彰化に入城したときしばらくは安全な場所にいたが、その後、日本に協力するようになり、彰化弁務署台中庁参事、臨時台湾旧慣調査会事務嘱託、総督府史料評定委

員会評議員などを歴任している。呉はいわゆる「親日派」であり、日本人との応酬詩や日本人に贈った詩を残している。こうした経歴が災いして、これまで呉の詩作品の評価は低かった。しかし、筆者は日本に協力的であったということだけで、「御用文人」として切り捨てるのではなく、詩人として、その作品そのものを分析する必要があるとする。そのうえで、呉の詩のテキストクリティークを行い、その後、台湾割譲前の台湾表現である「滄海」が台湾海峡を比喩している場合もあるが、多くは世の変転を表す言葉であることを明らかにした。そして台湾割譲初期の台湾表現では、台湾が日本統治となったことによる悲哀が込められていること、その結果、その後しばらくの隠棲期には仙境としての台湾表現がなされていないことを指摘する。これに対して、日本への協力期には再び仙境表現が出現する。「東瀛」「瀛東」「蓬萊」「瀛洲」などの表現の出現は、やむをえないものとして日本支配を受け入れたこと、日本統治が次第に台湾において受容されたこと、また1911年に清朝が崩壊して、呉の祖国が喪われたときに、台湾を仙境として詠うようになったことを指摘する。そこには、台湾は台湾であるという台湾意識の変化があったと筆者はする。呉の台湾表現の用例はさほど多くはないが、郷土への愛着がそうした表現をとらせており、日本を仙境とする意図はみられないことから、郷土台湾を誇りとし、日本に対する内心の抵抗があったとする。

このように割譲後の軌跡の異なる3人の詩人を取りあげて、それぞれの仙境表現の出現の形の相違を明らかにして、3人に共通する点として、「台湾人であること」「台湾は台湾であること」「台湾人の台湾」であることなどの「台湾意識」の萌芽とも見られるものがあることを明らかにした。

審査結果の要旨

本論文は、日本への割譲前後の台湾古典詩において台湾を仙境に比喩したいくつかの言葉を取りあげて、萌芽形態としての台湾意識とはどのようなものであったのかを論じている。その場合に、日本への割譲後に清国にいわば政治亡命のような形で内渡した詩人、台湾に残ったが日本の統治に協力せず隠棲生活した文人、台湾に残り後に総督府統治に協力した文人の三つに類型化し、丘逢甲、洪棄生、呉徳生の3人の詩作を取り上げ、それぞれの詩人の詩に現れる仙境表現の変化を明らかにした。その際に台湾総督府の統治に協力した文人を「低級でニセモノまがい」などと評価を低めるのではなく、作品と作品に現れている仙境表現に即して評価を行っている。この点は現在ではいわば当然のことであるが、これまでの台湾と中国の台湾文学研究にはみられなかった視点である。最近では次第に淪陥期文学の研究が行われるようにはなっているが、総督府統治下の台湾文学においてはこれまで研究されていない論点であり、未開拓の分野に挑戦した労作である。この点が本論文において評価できる第一の点である。

その際に「滄海」「蓬萊」「瀛洲」「蓬瀛」など、中国の古典に見られる仙境表現が台湾の比喩として使用されていること、そして、それは詩作者の依って立つ立場と時期により、肯定的に表現される場合と否定的に表現される場合があることを明らかにした。作品全体の評価、台湾古典詩のなかでの水準の評価という点がさほど明示的になされていないという点でやや弱い点があるが、3人の詩人の個々の詩作品に現れる台湾を仙境になぞらえた言葉において検討した研究は、これまでにないものである。この点が評価しうる第二点である。

また、三人三様に、台湾を仙境に比喩しているが、それぞれに共通するのは、台湾を故郷とする人間が、日本への台湾割譲によって故郷を喪失したこと、また清朝崩壊が清朝への帰属意識を失わせ、台湾意識となっていく萌芽形態と考えて、「台湾は台湾である」「台湾人の台湾」という現在の台湾における台湾意識に通じるものであることを明らかにした点も、評価に値するものである。

本論では、総督府の文化政策とどのように詩作品が関わっているのか、彰化を中心とする地域性、詩社の検討、本論文で扱われている時期の他の作者の作品との比較など残された課題はあるが、これらの点は今後の筆者の研究課題となろう。

これまで述べてきた評価にもとづいて、審査委員会は、本論文が博士号の学位請求論文として充

分な内容を備えていると判断した。また、以上で述べていたように、本論文は、台湾割譲前後の仙境になぞらえられている台湾表現を具体的な言葉をあげて検討することにより、台湾意識の萌芽を明らかにしたものであり、今後この時期の台湾古典詩の研究として重視される論文とである。また清末から日本統治時期の台湾古典詩研究としての専門性を備えていることから、博士（文学）が妥当であると判断した。